

Yumi Matsutoya



巻頭インタビュー1

大切な と き 14歳の時間

シンガーソングライター 松任谷由実

今号の巻頭は、新しい『中学生の音楽』の口絵にご登場いただいたお二人のインタビュー記事です。まずご紹介するのは日本を代表するシンガーソングライター、松任谷由実さん。幅広い世代から支持を得て「ユーミン」の愛称でおなじみの松任谷さんに、中学生だった頃を振り返りながら、長年大切にしている思いについて語っていただきました。

聞き手 ヴァン編集部

撮影：田中聖太郎

原点は14歳

Vent(以下、V):改訂される教科書の巻頭口絵ページにご協力いただき、ありがとうございました。由実さんが中学校に入学された頃の思い出はありますか？

松任谷:まず思い出すのは、パイプオルガンとの出会いです。私はキリスト教系の学校に入学したのですが、校内にパイプオルガンが設置されていて、入学後すぐの礼拝でバッハの『トッカータとフーガ ニ短調』を聴きました。パイプオルガンって、教会自体が楽器なのですよね。床や天井からの振動に包まれて、感応して涙がぱーっと出てきてしまいました。そのとき、その音が私の声にプリントされて、パイプオルガンみたいな声になっちゃったと思っています(笑)。この体験によって、私の音楽は教会音楽の影響を受けていると思います。



V:荒井由実時代の『翳^{かげ}りゆく部屋』は、パイプオルガンの前奏とピアノから、孤高な雰囲気を感じていました。

松任谷:孤高ですか！ 有り難い表現ですね。『翳りゆく部屋』の原型は、中学2年生のときにつくったものです。「自分でも曲をつくれるかもしれない、ロックができるかもしれない」と考えたのが、中学2年生でしたから。

V:作曲を始められたのは、中学2年生だったのですか？

松任谷:はい。当時私が弾けた楽器はキーボードだったので、ピアノ・ロックが好きでした。とりわけ感銘を受けたのがプロコル・ハルム*というグループで、その頃はブリティッシュ・ロックをたくさん聴いていました。デビューアルバムの『ひこうき雲』は、プロコル・ハルムの影響が強いです。

V:由実さんがご自身の14歳という時代を振り返るとき、どのようなことを感じますか？

松任谷:振り返るというよりも、私の中には14歳の自分がずっと存在していますね。14歳の時間は私の原点です。中学1年生では環境が急激に変わり、なじむことで精いっぱいでした。2年生になると少し見晴らしがよくなって、友達もできる。でも

思春期ですから、好奇心旺盛に過ごし、友達と笑い転げていたかと思うと、グレーのトンネルみたいな自分の世界に入り込んでしまう。そんなふうに、明るい場所と暗い場所を行ったり来たりした時間は13歳でも15歳でもなく、14歳ならではだと思のです。私自身、今でもその頃の自分がときどき顔を出します。

歌で描くのは、匂いと皮膚感覚

V:音楽でキャリアを積み重ねてこられた由実さんですが、詩人や小説家、コピーライター、デザイナー、映画監督……さまざまな職業にも就くことができたのではと思います。しかし、由実さんはずっと音楽から離れることなく、シンガーソングライターとして歌を続けてこられました。

松任谷:今言っていた職業、全て含まれているんです、シンガーソングライターに。詩を書くときは映画監督になったかのように、カメラを動かしてコンテをつなげる作業が必要です。音楽にするために時間の一瞬を切り取ることは、フォトグラファーのようでもありますし、それを言葉にするのはコピーライターのようでもあります。

V:1つの曲を生み出すために、さまざまな作業が詰まっているのですね。

松任谷:音楽は「時間をデザインすること」であり、それが他の芸術にはない点だと考えています。もし私が他の表現の道へと進んでいたなら、少し物足りなかったかもしれません。

V:選ぶべくして選んだのが、音楽だったのですね。歌をつくるときには、どのようなことを意識されていますか？

松任谷:匂いや湿度の皮膚感覚を描くことを、いちばん大切にしています。音楽の中で、具体的なストーリーをつくらうとは思っていません。「その匂いを嗅いだことがある」「その雨に触れたことがある」、そんなふうにしてもらえる歌が描ければ、聴いた方それぞれのストーリーがおのずと浮かび上がり、リアルな体験として実感していただけるのではと思うのです。

V:由実さんのつくった多くの歌は、それぞれキャラクター性の異なる、さまざまな世界観が描かれています。

松任谷:私、同じところにとどまっていると飽きちゃうんですよ(笑)。だから歌もいろいろなジャンルを取り込んでいます。

* Procol Harum (プロコル・ハルム)

1960～70年代に活動したイギリスのロックバンド。クラシックやブルースの要素を取り入れ、ピアノとオルガンのツイン・キーボードの編成が特徴。代表曲に『青い影』がある。1991年に再結成。2012年には松任谷由実さんとジョイントライブを行った。写真は1967年頃。





音楽は、いつでもタイムカプセル。
誰もがそこに乗って、旅ができるのです。

○ 松任谷由実(まつとうや・ゆみ)

日本を代表するシンガーソングライター。1972年、荒井由実の名でデビューし、1976年の結婚と同時に松任谷由実に改名。常に第一線で音楽活動を続けている。2018年にはデビュー45周年を記念した3枚組ベストアルバム『ユーミンからの、恋のうた。』がリリースされた。現在、松任谷由実によるインターネットラジオ「松任谷由実はじめました(通称:うそラジオ)」が放送されている。毎週金曜日更新(金曜午前11時～4週間後の金曜午前11時まで、4週間のオンエア)。

クラシカル、アメリカンポップス、和のテイストのものもあれば、エスニックなものも。旅先での発見が、音楽につながることもあります。

V: さまざまな文化が由実さんの音楽に生きているのですね。由実さんご自身は大学で日本画を専攻されています。またご実家は呉服屋さんとのことですが、日本文化についてどのようにお考えですか？

松任谷: とてもユニークな文化だと思います。移りゆくものの中にさまざまな表情があり、ミニマルに現れている。私の表現にも、そのような日本文化が入っていて、洋楽的なアプローチをしても、どこかに「やっぱり日本人なんだ」と感じる部分が出ています。

V: あらためてお聞きしたいのですが、由実さんにとって音楽とは、どのようなものなのでしょう？

松任谷: 音楽は、いつでもタイムカプセルです。行き先は、遠い時代かもしれないし、1年前、1週間後かもしれない。必ず誰もがそこに乗って、旅ができるのです。そんないろいろな時間を行き来することができるのが、音楽の魅力だと感じています。抽象的すぎますかね？

V: いいえ、とてもすてきです！

伝えたい大切なこと

V: 話題を変え、ちょっと気後れする質問なのですが、人が生きていくうえでどのようなことが大切だとお考えですか？

松任谷: 「純粹な心をもち続けること」と、「人と違うことを恐れないこと」。もしも何かに感動したのなら、その気持ちを素直に受け止めることが大切です。人の意見を聞く前に、自分がどう感じるかを大切にしてほしい。それから、失恋は人の成長に大切なことだと思いますね。

V: 恋愛ではなく、失恋が大切なのですか？

松任谷: そうです。10代の年頃は、失恋することも少なくないでしょう。失恋すると、必ず自分自身が変わります。そのとき落ち込んだとしても、もう一度外に出て新しい視点で物事を見てみれば、新しい何かに出会う。新しい失恋もある(笑)。失恋から「この世には自分の望みがかなわないことがある」「人の心はコントロールできない」という感覚を得ることは人にとって大切ですし、他者を慮る心、想像力を育みます。

V: 由実さんがくじけそうなきやつらいとき、どのように乗り越えてこられましたか？

松任谷: 私、簡単にくじけないんです(笑)。古今東西のすばらしい才能に常に触れていると、自分はまだまだだと思えるんです。ふだんから私は意識的に「よいもの」に触れるように心がけていて、先人が「よいもの」として私たちに受け継ぎ伝えてきた絵画、オペラ、焼き物、文学……何でもいからそれに接してみます。本物に意識して触れていくと、そのうち偽物も分かってきますから。そうやって、自分が磨かれていくんじゃないかなと思います。

V: 本物に常に触れることは大事なのですね。最後の質問になりますが、14歳の子どもたちには、今の時間をどのように生きてほしいと思いますか？

松任谷: うーん……、難しいですね。私が14歳だった頃とは世界が激変していますし、その子によって環境もさまざまですから。ただ、回り道にこそ宝物があると思うんです。私自身、回り道をしがちなところがあって、例えばインターネットで何かを調べても、別の気になることを見つけたら、実際その場所に行ってしまうのです。すると、またさらに違う何かに出会って……。すぐに目的にたどり着こうとは思いません。世界はこれからも変わっていきますが、純粹な心さえもっていれば、どんなことにも立ち向かうことができるはず。回り道をするのがあったとしても、その過程を楽しんでほしいなと思います。

分からないことを喜びましょう。
分からないことを一つの起点にしましょう。

巻頭インタビュー2

「現在」という 最先端を生きる

狂言師 野村萬齋

次にご紹介するのは、野村萬齋さんです。狂言師でありながら、映画やテレビなどさまざまなフィールドで活躍する萬齋さんは、東京オリンピック・パラリンピック開閉会式の総合統括も務めます。本インタビューでは、狂言や日本文化について、お考えを語っていただきました。

聞き手 市川かおり（株式会社教育芸術社 代表取締役社長）

撮影：島崎信一

時間と空間をエンターテインする

市川(以下、I)：以前に「野村狂言座」(演目：『^{ぼうしびり}棒縛』^{らくあみ}楽阿弥』^{じんだろう}鈍太郎』)を拜見しました。能の形式を模した舞狂言『^{らくあみ}楽阿弥』は、野村万作さん、野村萬齋さん、野村裕基さんの三代が務められ、すばらしかったです。ただ、少し難しさも感じました……。狂言といえば、直接的なおもしろさを感じる人が多い

とっていましたが、『^{らくあみ}楽阿弥』は独特な世界ですね。

萬齋：そうですね。まずこのストーリーの「尺八の吹き死にをする」という発想自体がよく分からないですよ。楽阿弥は音楽が好きで尺八を吹いていたのだけど、周りに受け入れられなくて、尺八の製法のように、曲げられたり、ねじられたりして死を迎え、地獄のようなところに落ちてしまう。さまざまな解釈や考え方ができますので、僕自身も今ようやく解題でき

あらすじ

【第84回野村狂言座】
(2018年12月6～7日)
プログラムより

『^{ぼうしびり}棒縛』……二人の家来が、留守中に酒蔵の酒を盗み飲んでいると知った主人は、^{たろう}太郎冠者を棒に、次郎冠者を後ろ手に縛って出かけてしまう。それでも酒が飲みたい二人は知恵を絞り、縛られたまま酒を飲むことについて成功

する。酔った二人が話えや舞えやと大騒ぎしている……。

『^{らくあみ}楽阿弥』……伊勢の国 別保松原に着いた僧は、松の木にたくさんの尺八がかけられているのを見る。辺りに人はいわれを尋ねると、昔ここに

住んでいた楽阿弥陀仏という人が尺八の「吹き死に」をしたので、それを葬った塚で、今日はちょうど命日だと語る。僧が尺八を吹いて弔うと、楽阿弥陀仏の幽霊が現れ、僧とともに尺八を吹き始める。

『^{じんだろう}鈍太郎』……三年ぶりに西国から帰京した鈍太郎は、早速妻と女を尋ねるが、久しく音信すらなかったため、二人とも本物の鈍太郎と信じない。落胆した鈍太郎は、出家してひとり修行の旅に出ることを決心する。ところが、後から

真実を知った妻と女が、あわてて鈍太郎に出家を思いとどまるよう頼むと、鈍太郎は都合のいい提案をし始めて……。

ている感じです。

I: 舞台上に立っているときに、ご自身と観客の一体感は感じられるものでしょうか？

萬齋: 『棒縛』や『鈍太郎』のような演目であれば、一体感を感じることはよくあります。観客と演者のコミュニケーションでもありますが、「時空を操る」ことでもあるんですよね。それは我々の使命であり、お客さんと共有したい最も大切な感覚です。「時間と空間をエンターテインする」と言ってもいいかもしれません。独特の時間・空間をつくり出すことができれば、どの世界に行っても通用するんじゃないかと思います。

「型」の伝承はデジタルなこと

I: 万作さん、萬齋さん、裕基さんの三代が一つの舞台上で演じられているのを拝見したときに、伝統をつないでいく様子を目の当たりにした気がしました。「伝統の継承」ということについてはどのようにお考えでしょうか？

萬齋: 芸を伝えることは、自分の芸としてもっているものを弟子にコピーして自分の分身をつくることです。基礎的な技術を身に付けるために師匠に言われた通りのことをまずやる。芸のプログラムが体に組み込まれないと、狂言師としては機能していない状態ですからね。個性は一度殺しているかもしれませんが、そのうちだんだん個性が出てきて、弟子は弟子の芸になっていくのでしょう。

I: まずは「まねる」ということでしょうか？

萬齋: はい。まさしく「まねる」ことから始めます。コンピュータで例えるなら、まずは師匠と同じソフトウェアを共有しながら、アップデートしていく。ある程度成長すると、自分なりの最新バージョンへと変化するようになります。

I: アナログの世界という印象がありましたが、実はデジタルな世界ですね。

萬齋: 「型」を伝承するのは、デジタルなことなんです。実は「型」とは「つくっていくもの」。「型にハマる」とは、自分の機能はその領域にまで上がることだと思います。「型」を確実に身に付ければ、それだけ精度の高いコンピュータになることができる。僕は自分の本で「狂言サイボーグ」という言い方をしていますが、「型」の使い方まで分かってきたときに、まさしく「時間や空間を操る」ことができるようになります。

学びの根源は「分かったい」と思うこと

I: 現代の子どもたちが古典芸能を理解するにはさまざまな難しさがあると思いますが、萬齋さんは狂言師としてどのようなことを子どもたちに伝えたいですか？

萬齋: 人間は昔からそんなに変わらない、ということですね。人間は、人間の生きている様子をさまざまな表現方法で活写してきて、それが時代を超え、文化を超え、ときに言語を超えて楽しむ。私たちは皆、祖先が代々つないできた線の最先端に



『棒縛』
 撮影：政川慎治

ある「現在」という点に生きている、という意識をもってほしいです。「分からないからノーサンキュー」ではなく、「分からないことを喜びましょう。分からないことを一つの起点にしましょう」と伝えたいですね。好奇心をもって「これを分かりたい」と思うことが学びの根源じゃないですか？ 結局のところ、おもしろいか、おもしろくないか、それだけですよね。そういう意味でいうと、大人よりも子どものほうが正直なので、子ども相手は手が抜けない。大人は説明すれば納得してくれますが、子どもはおもしろくなければ寝てしまったり、別のことを始めてしまったり。さらに発達の時期によっては、おもしろいだけでは、うまくいかないこともあります。

I: 日頃、若い人たちの感覚を揺らすもの、将来どこかで花咲くようなものを与えたいと思っていますが、伝えることはなかなか難しいです。

萬齋: でも、根気よく見せていくうちにきっと何か感じ取ってもらえるのだと思います。「つまらない」と思ったときも、なんでこんなにつまらないんだろうと考える

ことで、むしろそのおもしろさ、奥の深さに気付かされることもあるのでは。例えば、リズムがゆっくりすぎるけれど、どうしてゆっくりなんだろうとか。そこから、拍に伸び縮みがあるという日本の身体感覚に気付くことだってできる。それがさらに「一本締め」のリズム感覚ともつながったりして。

I: 日本人は欧米諸国の人たちと比べて、協調性ばかりで個性がないというようなことがいわれますが、萬齋さんはそのあたりをどのようにお考えでしょうか？

萬齋: 「型」を使えば自動的に表現ができるデジタルなものがあるとするならば、社会で生きていくうえで必要最低限の「型」を教えずに個性を発揮しなさいと言っても、できないと思います。「型」をひたすら実践していくタイプの人もいれば、「型」を使って自由に遊びたがる人もいるし、それこそ個性ですよ。音楽の話をする時、ドレミの音でも「ドーレーミー」と「ドーレーミー」と「ドーレーレーミー」と少しずつただで表情は変わっていきますよね。音符や音楽記号を覚えるのも重要ですが、まずは楽器をどんどん叩いてみて、叩き方によって音が変わることに気付くことも大切です。そして、もっときれいな音にするためにはどうするかを考えるようになれば、音符や音楽記号も必要になってくる。そのような流れが重要な気がします。

時代を超えて続く日本文化

I: さて、東京オリンピック・パラリンピック開閉会式の総合統括をされていますが、日本人の感性や表現力のポテンシャルに



○ 野村萬齋(のむら・まんさい)

祖父・故六世野村万蔵及び父・野村万作に師事。重要無形文化財総合指定者。東京芸術大学音楽学部卒業。1994年に文化庁芸術家在外研修制度により渡英。芸術祭新人賞、芸術選奨文部科学大臣新人賞、朝日舞台芸術賞等、受賞多数。「狂言ござる乃座」主宰。2002年より世田谷パブリックシアター芸術監督。国内外で多数の狂言・能公演に参加、普及に貢献する一方、現代劇や映画・テレビドラマの主演、舞台『敦-山月記・名人伝-』『国盗人』など古典の技法を駆使した作品の演出、NHK『にほんごであそぼ』に出演するなど幅広く活躍している。

おいて、萬齋さんはどのようなところに注目なさっていますか？

萬齋: 「生きていること」をみんなで謳歌するのがオリンピックではないかと考えています。あくまで「生」への讃歌でありますが、海外では「生」を厚塗りしたくなる傾向にあるような気がします。しかし、日本には向いていないことですから、逆のベクトルが必要になってきます。10の幅をつくるにしても、0から10ではなく、マイナス5からプラス5で同じ幅をつくる。少ないエネルギーで豊かに幅を感じさせることが日本の感性にはあります。オリンピックは、「生」のお祭りでもありますが、「生」をありがたく喜ぶためにも、「死」を土台にする。我々が生きている今現在は、「死」を乗り越えた上にあることを訴えたいと思っています。それから、現代の日本の音楽を見ると、雅楽があって能楽があって、歌舞伎や浄瑠璃があって、そしてJ-POPまで、それぞれが共存しています。先行芸能を否定しないで、すだれ状に伝えていくのも日本人の特性ですよ。世界を見てみると、過去の文化を否定することから始めるので、当時どのように行われていたかは分からなくなってしまふ。日本は600年、700年前のものが、ほぼそのまま、もちろん時代によって変わっていないわけではないですが、続いているわけです。「他のものを否定しないで自分たちがいる」こと、これは今とても重要なことではないかと考えています。そういう意味でいうと、狂言の「このあたりのものでござる」というセリフには、どんな主義・主張があっても、みんなこのあたりのもの、人間として、または生物として、地球上の物体として、というような視点をもっているわけで、それはとても重要ではないかと思っています。

特集

新しい『中学生の音楽』 『中学生の器楽』のご紹介

[中学校用教科書 内容解説資料]



本号のヴァンは、令和3年度から使用される教科書、新しい『中学生の音楽』『中学生の器楽』と同じ紙で製作しました。ぜひ実際の手触りや質感、色などをお確かめください。

表紙(P.1・2・43・44)…「口絵」の部分で使われる紙
表紙以外(P.3～42)…「本文」で使われる紙

令和3年度から中学校用教科書『中学生の音楽』『中学生の器楽』が改訂されます。
教育芸術社では、音楽科の果たす役割を考えながら、今日的な教育の課題にも対応する、新しい時代にふさわしい教科書を目指して編集してまいりました。

- 中学生の音楽
- 音楽科で身に付ける「三つの資質・能力」
- 音楽科で実現する「主体的・対話的で深い学び」
- 「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる」
- 中学生の器楽
- 新曲紹介

義務教育9年間の系統的な学びで、「資質・能力」を育みます

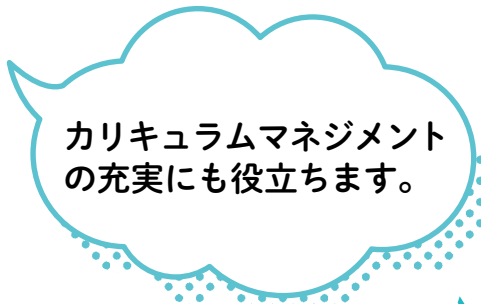
▶ 系統的な題材構成により、学びが積み重なります。

生徒の発達段階に応じて三つの資質・能力を無理なく育むことができるよう、小学校、中学校9年間の系統性と一貫性を重視して学習内容を配列しました。

※小学校は『小学生の音楽』（令和2年度版）における「題材名」を、中学校は『中学生の音楽』における教材の「学習目標」を示しています。
※小学校における鍵盤ハーモニカやリコーダーの演奏に関する題材は、『中学生の音楽』の内容につながります。



詳細は教育芸術社のホームページでもご覧になれます。
<https://www.kyogei.co.jp/>



ユニバーサルデザイン(UD)に向けた取り組み

UDフォントを全編に使用

▶ UDフォントを全体の9割以上に使用しています。タイトルや文章、楽譜中の歌詞に使用することで、可読性、可視性を高めました。



1年 p.34

特別支援教育の視点に立った配慮

▶ 歌詞や文章を写真中に入れるときには、無地の部分に配置したり白文字を使用したりすることで、読みやすさを確保しました。全体にレイアウトや囲みの形を工夫し、視認性の高い紙面構成となっています。



2年 p.18・19

音楽科で身に付けられる 「資質・能力」が一目で分かります

▶ 学習指導要領に示された三つの資質・能力と、それに対応する学習内容や教材を示した「学びの地図」となる内容を、目次に続くページに示しました。

「中学生の音楽」の学習内容

学習指導要領に示された三つの資質・能力と、それに対応する学習内容や教材を示した「学びの地図」となる内容を、目次に続くページに示しました。

資質・能力の三つの柱

- 言語による表現能力
- 音楽的表現能力
- 音楽的鑑賞能力

共通事項に示されている「音楽を形づくっている要素」

1年 p.8・9

先生のご参考として

〈使用例〉・ 1年間の学習指導計画を立てるとき
 ・ 評価規準を考えるとき

生徒の学習において

・ 各教材を通して自分がどのような音楽の力を身に付けられるのかを確認するとき

1年間で学習する
内容が分かる
「学びの地図」。

分かりやすい紙面構成で、 確実な学びをサポートします

▶ 音楽科における三つの資質・能力を確実に育成できるよう、「学習目標」「活動文」「音楽を形づくっている要素」を各教材に設定し、それらが一目で分かるように示しています。

学習目標

「何を学ぶか」を明示し、意識することにより、生徒が主体的に学習に取り組むことができます。

活動文

学習目標に迫るための具体的な学習活動を例示。

音楽を形づくっている要素

「音楽的な見方・考え方」を働かせる際の大切な視点となる「音楽を形づくっている要素」を各教材に例示。

アイコンではなく[共通事項]に示された文言で記載し、より充実した言語活動につなげます。

曲の構成

1 「主眼句」を捉え、曲の構成を分析し、その特徴を説明しよう。

2 学習目標に迫るための具体的な学習活動を例示しよう。

3 学びの目標を達成するために、具体的な学習活動を計画しよう。

1年 p.18・19

用語や記号など

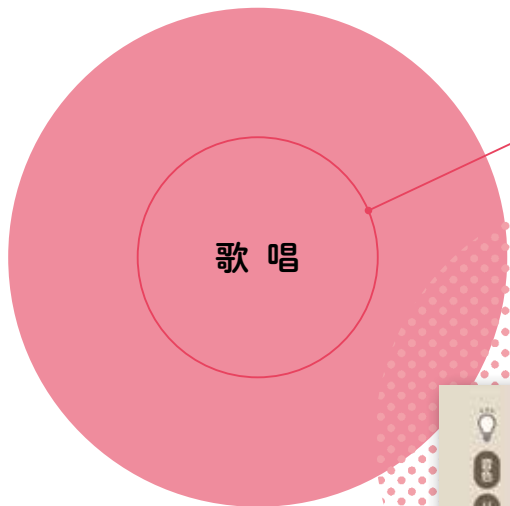
学習指導要領の[共通事項]に示されている用語や記号などを、新出時に大きく取り上げています。

「深めよう! 音楽」

主体的・対話的で深い学びを実現する新コーナーです。手順に沿って学習を進めることで、音楽科における資質・能力を確実に身に付けることができます。

生徒自身が学びを自覚できるように、手立てを充実させました

▶教科書の手順に沿って学習を進めることで、主体的・対話的で深い学びを実現することができます。また、生徒が自分の考えをワークシートに書き込み、整理しながら学習を進めることができます。



「深めよう!音楽」で、主体的・対話的で深い学びを実現します。

どのようなことを話し合ったらよいのかを例示し、より深まりのある言語活動や協働的な学びを促します。

深めよう!音楽

パートの役割と旋律の重なり方

1 「朝の風に」のパートの役割を確認しましょう。各段のパートの役割を□から選んで、下の表に書き入れましょう。

	主旋律	副旋律
1段目 女声:	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2段目 女声:	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3段目 女声:	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4段目 女声:	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5段目 女声:	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

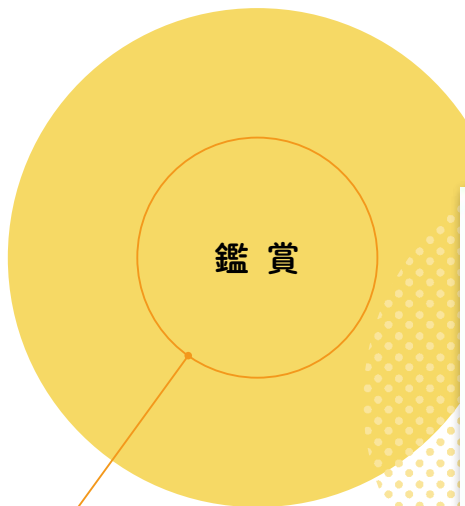
2 1段目と2段目を比べて、響きはどのように変わりますか。実際に歌ってみて、響きの違いを感じ取りましょう。

3 1目で調べたことをもとに、歌い方を工夫しましょう。

2段目は男声が増加して全体の響きが厚くなるから、男女ともに豊かな声で歌おうかな。 そうすると、女声だけの1段目はどのように歌ったらいいかな?

30

1年 p.30・31



鑑賞教材にも「深めよう!音楽」を配置。「聴き取ったこと(知覚)」と「感じ取ったこと(感受)」をワークシートに書き込んで整理し、深い理解へと導きます。

深めよう!音楽

曲想の変化

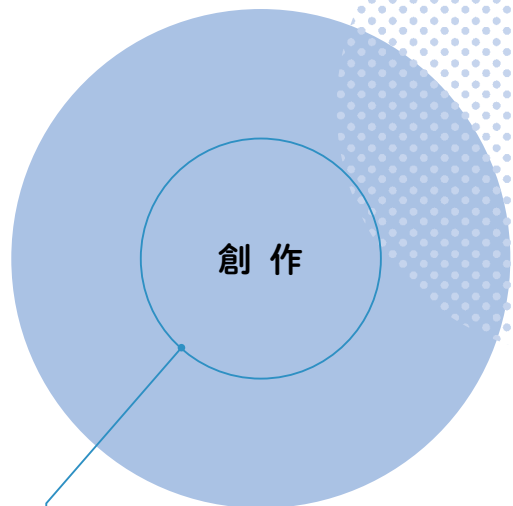
1 聴き取ったこと(知覚)を整理し、感じ取ったこと(感受)を整理し、曲想の変化を整理しましょう。

2 この曲の曲想の変化を整理し、感じ取ったこと(感受)を整理し、曲想の変化を整理しましょう。

パート	感じ取ったこと(感受)	感じ取ったこと(感受)
1		
2		
3		
4		
5		

47

1年 p.47



創作教材では、より丁寧に手順を示すことで、生徒も先生も無理なく学習を進めることができるよう配慮しました。

見方・考え方を働かせて、生徒が自ら課題を見付けられる学習を充実させました

▶ 演奏者からのアドバイスを紹介したり、体験活動を取り入れたりするなど、様々な角度から主体的・対話的で深い学びをサポートし、実感を伴った理解を促します。

演奏者からのアドバイス

清水真二さん(前田真生シテ方)

[それぞれの部分で気を付けること]

①の部分 前にのって、「1音」音の生みず(産み字)をはっきりと、力強く出すように感じて歌います。しだいに音量が上がってきますので、生みずを飛ばしている裏拍の部分で音の開始を始めていきます。また、フンが上下する「あへり」の部分にも注意しましょう。

②の部分 「コラー ぶなればは」の「コラー ぶなればは」の部分は、「ハシリ」というリズムです。しっかりと息を吐き、の部分で音の開始を始めていきます。

③の部分 前にのらずに歌います。特に最後の「おー」の部分は、髪が遠くに行ってしまったことを表現するようなイメージで、大きく歌いましょう。

真生を伸ばし、おんちの頃から歌を出すような感じで歌う。



3年 p.48

指揮 をしてみよう!

歌本を指揮で表現して、より豊かな音楽活動につなげよう。

1 「文筆曲第5章」の指揮(指揮棒)を、歌本を指揮で表現して、より豊かな音楽活動につなげよう。

2 指揮棒の動きをしよう。また、指揮棒の動きに合わせて、指揮のリズムを手拍子で打ったり、言葉を行って歌ったりしよう。

3 歌って、指揮棒の動きから指揮をしよう。その際、指揮棒の動きから、次のポイントに気を付けながら、第1主題と第2主題の違いを感じ取ろう。

注目するポイント: 1. 主題 2. 指揮 3. 指揮 4. 指揮

「文筆曲第5章」の指揮のポイント

指揮者(指揮棒)の動きを、指揮棒の動きに合わせて、指揮のリズムを手拍子で打ったり、言葉を行って歌ったりしよう。



2年 p.50

4 3段目はどのような旋律の重なり方になっていますか。リズムに注目して、互いの声を聴き合いながら歌い、旋律の重なり方の違いを感じ取りましょう。

い ま ひかりは そらにあふれて
 い ま ひかりは そらにあふれて

女声が男声を追いかけるようにして歌っている。 女声と男声が同じリズムで歌っている。

互いに呼びかけるような気持ちで、掛け合いがきれいに聴こえるように歌いたいな。
 「あふれて」は男女とも同じリズムになるから、ハーモニーをきれいに歌いたいな。

5 1～3で考えたことをもとに、4～5段目も工夫して歌いましょう。

31

My Melody

「My Melody」の音楽的要素を、グラフや図表で表現し、音楽の構造を理解しよう。

1 音楽の要素をグラフで表現しよう。

2 音楽の要素をグラフで表現しよう。

3 音楽の要素をグラフで表現しよう。

4 音楽の要素をグラフで表現しよう。

5 音楽の要素をグラフで表現しよう。



1年 p.21～23

My Melody

1 音楽の要素をグラフで表現しよう。

2 音楽の要素をグラフで表現しよう。

3 音楽の要素をグラフで表現しよう。

4 音楽の要素をグラフで表現しよう。

5 音楽の要素をグラフで表現しよう。

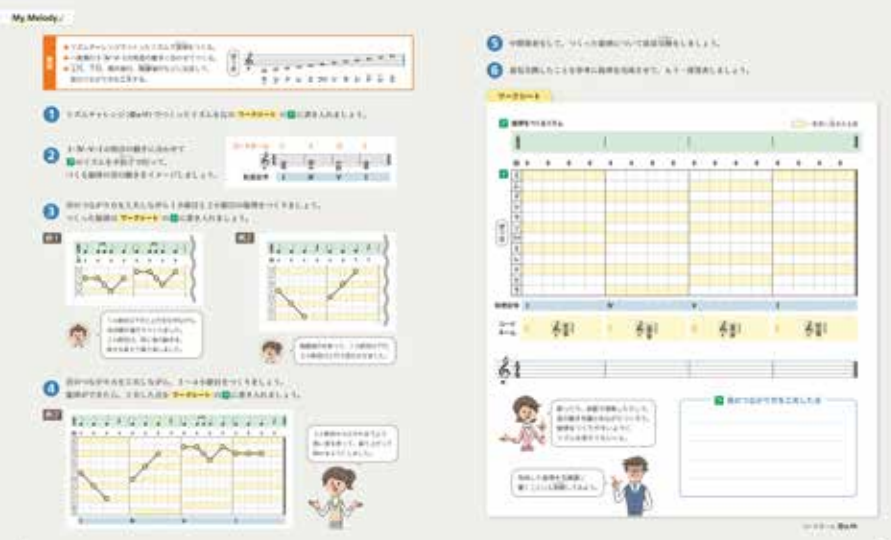
6 音楽の要素をグラフで表現しよう。

7 音楽の要素をグラフで表現しよう。

8 音楽の要素をグラフで表現しよう。

9 音楽の要素をグラフで表現しよう。

10 音楽の要素をグラフで表現しよう。



郷土の音楽文化を尊重する態度を育みます

- ▶ 生徒が興味・関心をもって自分の住む地域の文化に親しむことができるよう、日本各地に伝わる民謡、祭りや芸能を教材として取り上げるとともに、中学生が郷土の祭りや芸能の担い手として活躍している様子を紹介しています。



3年 p.54・55



2年 p.69

我が国の音楽文化を尊重する態度を育みます

- ▶ 3年間を通して、我が国の様々な伝統音楽、伝統芸能を取り上げました。自国の文化に対する誇りをもつことで、グローバルな時代に対応する力を育むことができます。



2年 p.56・57



3年 p.40・41

生涯にわたり音楽文化に親しむ態度を育みます

- ▶ 在学中、そして卒業後も様々な音楽と出会ってほしいという願いをこめて、クラシック音楽やポピュラー音楽など多彩なジャンルの作品を紹介する資料を掲載しています。

音楽の学習を通して 社会とつながります

▶ 音や音楽が、生活や社会、文化とどのように関わり、どのような意味や価値をもつのかを、生徒が意識的に考えるページを新設しました。

生活や社会の中の音楽

生活や社会の中の音楽
仕事と音楽

仕事の中には音楽に関わる仕事がたくさんあります。それらは文化、教育、そして人々を支えています。

楽器の修理やリペアの店や楽器のレンタル店、楽器の販売店などがあります。

音楽教育の現場では、音楽の力を活用して、子どもたちの心を開き、成長を促しています。音楽を通して、子どもたちが自分自身を表現し、コミュニケーションを図ることができます。

ピアノの演奏が音楽を愛する人々に感動を与えています。音楽は心を豊かにし、人々を感動させてくれます。

音楽教育とSDGs(エスディーゼーズ)

音楽は多くの人々を笑顔にする力があります。音楽は心のつながりをつくり、世界に平和をもたらします。音楽は、子どもたちの心を育て、成長を促します。音楽は、子どもたちが自分自身を表現し、コミュニケーションを図ることができます。

音楽は、子どもたちの心を育て、成長を促します。音楽は、子どもたちが自分自身を表現し、コミュニケーションを図ることができます。

音楽は、子どもたちの心を育て、成長を促します。音楽は、子どもたちが自分自身を表現し、コミュニケーションを図ることができます。

3年 p.68・69

SDGsの視点で考える

3年生ではSDGs(Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標)として定められた17の目標から「4:質の高い教育をみんなに」を取り上げ、世界各地で音楽教育を支える「青年海外協力隊員」や支援スタッフとして働く日本人の活動を紹介しています。

日本とは全く違う環境で音楽教育を受ける世界の子どもたちに思いをはせ、現地の子どもたちにとって、音楽がどのようなもので、どのような役割を果たすのかを考えることで、国際理解や道徳的な心情を養う一助となることを願っています。



震災復興 支援

震災からの復興を願って今も歌い継がれる楽曲を掲載しました。音楽のもつ、人々の思いをつないだり誰かを勇気付けたりする力を、歌を通して実感します。

花は咲く
歌い継ごう日本の歌
若井優二 作詞/菅野よう子 作曲・編曲

あすという日が
山本隆子 作詞/八木澤教育 作曲

3年 p.70

1年 p.88

『中学生の器楽』のリニューアルポイントを紹介します

- ☞ ソプラノ リコーダーの扱いが充実。
- ☞ 打楽器の種類を追加(カホン/ジェンベ/ドラムセット)。
- ☞ 箏による創作を一新。
- ☞ 単旋律の補助教材「楽器でMelody」を新設。
- ☞ 魅力的なアンサンブル曲を掲載。

新曲 『I Got Rhythm』(G.ガーシュイン 作曲/佐井孝彰 編曲)
アルトリコーダー + 低音楽器 + 打楽器

『笑点のテーマ』(中村八大 作曲/赤羽耕史郎 編曲)
ソプラノリコーダー + ギター または アルトリコーダー + ギター

『One Week』(滝口亮介 作曲) ボディー パーカッション ほか

打楽器の種類を追加

新曲『One Week』

演奏動画より



3パートにわかれて演奏します。



もも打ちの細かいリズムや、半拍遅れで似たリズムが重なるおもしろさが楽しめます。

『One Week』の演奏動画はこちらをご覧ください。



https://www.kyogei.co.jp/data_room/vent/vol43_r3jhs_shinkyoku.html#oneweek

カホン

楽器の打面を前に向け、その上にまたがって構え、手のひらを振り下ろして打ちます。下の図のように、打つ場所と手の当たる部分によって音色が変わります。

楽器の威力を活かしてもよい。

楽器の威力

スラップトーン (ST)

エッジトーン (MT)

ベーストーン (BT)

練習

右一音 上ー右

ジェンベ (Jembe)

椅子に座り、楽器を膝に挟んで構え、手のひらを振り下ろして打ちます。下の図のように、打つ場所と手の当たる部分によって音色が変わります。

楽器をもよおさないように、楽器を少し前に傾ける。

楽器の威力

ベーストーン (BT)

エッジトーン (MT)

スラップトーン (ST)

練習

右一音 上ー右

ドラムセット

ばち(木太鼓(Opka))と同じように持ちます。体全体を使って腕の向きや高さを変えながら、それぞれの楽器を打ちます。BDとHHのペダルには足の爪先をのせて、踏んだり蹴ったりしやすいように構えます。

基本的なドラムセットの例

キャッチ (CATCH) / スネア (SNARE)

ハイハット (HI-HAT) / トム (TOM)

ベースドラム (BD) / フロアトム (FT)

練習

右一音 上ー右

三つの資質・能力を、分かりやすい紙面構成で身に付けます

- ▶ 音楽科における三つの資質・能力を確実に育成できるよう、「学習目標」「活動文」「音楽を形づくっている要素」を各教材に設定し、一目で分かるように示しています。これらの学習を通して、資質・能力や音楽的な見方・考え方を身に付けることができます。

学習目標

「何を学ぶか」を明示し、意識することにより、生徒が主体的に学習に取り組むことができます。

活動文

学習目標に迫るための具体的な学習活動を例示。

音楽を形づくっている要素

「音楽的な見方・考え方」を働かせる際の大切な視点となる「音楽を形づくっている要素」を各教材に例示。

アイコンではなく〔共通事項〕に示された文言で記載し、より充実した言語活動につなげます。



「深めよう! 音楽」
主体的・対話的で深い学びを実現する新コーナーです。
具体的な手順と、キャラクターによる深い学びを引き出します。

器楽 p.14・15

主体的・対話的で深い学びを実現する手立てを示しました

- ▶ 学習の取り組み方を分かりやすく示した「深めよう! 音楽」をはじめ、和楽器の表現をより深めるための唱歌の活動、演奏者からのメッセージなど、深い学びを実現するための手立てを充実させました。

器楽の学習を通して社会とつながります

- ▶ 『中学生の器楽』も『中学生の音楽』と同様、音楽そのものや、生活や社会の中の音や音楽について考える内容を幅広く取り入れています。



唱歌

器楽 p.46

1年p.56「六段の調」の鑑賞との関連を図ることができます。



器楽 p.4・5

器楽
↓
鑑賞

音楽って
なんだろう?

同世代の音楽活動



器楽 p.107

本特集の最後は、『中学生の音楽』に掲載された新曲をご紹介します。範唱やパート練習用の音源収録にご協力いただいた演奏者の皆さんに、曲の特徴や魅力について語っていただきました。

本ページでご紹介した新曲は
こちらからご試聴
いただけます。—————>



https://www.kyogei.co.jp/data_room/vent/vol43_r3jhs_shinkyoku.html

『その先へ』

やまざきともこ
山崎朋子 作詞・作曲
1年 p.12・13 掲載

旋律がサビに向かって徐々に気持ちが高ぶっていくように作曲されていて、気付いたら自然に口ずさんでしまう曲です。変声期の男子が歌いやすい音域なのも魅力！

一瞬で過ぎ去ってしまう中学時代、その中で一生ものの友達ができる人もいるでしょう。自分一人では気持ちが負けて前に進むことができないときがあるかも……、でも友達がいるから一緒にその先へ進むことができる。そんな歌詞の内容を味わいながら、優しく歌ってもらえると嬉しいです。

荒木俊雅
パート練習用音源演奏



荒木俊雅 (あらき・としまさ)

国立音楽大学音楽学部演奏学科
声楽専修卒業。声楽を福井敬氏
に師事。ヴォーカル・コンソ
ート東京メンバー。二期会準会員。
5月23日(土)福島復興祈念演奏
会「カルミナ・ブラーナ」(練馬
文化センター)にソリストとし
て、5月29日(金)二期会DAYS
オペラ『光太夫』(サントリー
ホール)に磯吉役で出演予定。

『友達の友達』

おかちまちかい
御徒町凧 作詞
アベタカヒロ 作曲
1年 p.74・75 掲載

中学生になったある日ふと抱いた、それまで
とても親しくしていた友達といつの間にか疎
遠になってしまった寂しさを思い出した作品
です。伴奏パートには、うまく言葉にできず
整理もできない心のうねりが表れているよう
に思います。フレーズの流れを音楽的につか
むためや、正確な音程を取るために歌詞の朗
読練習をし、歌唱時には、子音の発音を明確
にすることを心がけました。

生出悦子
パート練習用音源演奏

生出悦子 (おいで・えつこ)

東京音楽大学卒業、同大学声
楽研究生修了、二期会オペラ
スタジオ研究生マスタークラ
ス修了。日本クラシック音楽
コンクール全国大会一般の部入選、
全国童謡歌唱コンクール大人の
部金賞と寛仁親王副牌受賞。オ
ペラ、宗教曲、歌曲、声楽アン
サンブルのコンサートに多数出
演し、映画やテレビの音楽収録
に参加している。二期会会員。



『Yes!!』

きたかたひろたけ
北方寛文
作詞・作曲
1年 p.76・77 掲載

この曲の魅力はズバリ、力強さだと思います！
歌い出しの歌詞のスケールの大きさとユニゾンで歌う
ことにより前に進むエネルギーを感じます。
次に出てくる旋律では自身の等身大の姿を表すような歌
詞と、横に流れるようなフレーズに変わります。そこでは、
自身の心への問いかけのような雰囲気です。サビでは、思
い切り前に進み歌い、掛け声の「Yes!」では自身の確信
と決意の表れのように声を出すと、本当に気持ちがいいです。

人には個性があります。この曲では、様々な個性の人が
団結し声を合わせることができるのではないかと思います。
ぜひ、この歌を通して、みんなで力を合わせて前
進していく楽しみを感じてほしいです。

斉藤博子
パート練習用音源演奏



斉藤博子 (さいとう・ひろこ)

東京音楽大学大学院声楽専攻
修了。小学生の頃から始めた合
唱をきっかけに声楽の専門の
勉強を始める。音楽大学卒業後
は合唱団のヴォイストレーナ
ーとして複数の合唱団に携わり、
現在は歌を通し、福祉施設や老
人福祉施設などに慰問演奏に
行く他、合唱指導、また声楽家
としても様々なオペラ、演奏会
に出演活動中。

横山琢哉 (よこやま・たくや)

北海道生まれ。2007年、イタリアで行われた第4回マリエレ・ヴェントレ国際合唱指揮者コンクールで第2位を受賞。栗友会副音楽監督、合唱人集団「音楽樹」幹事、武蔵野音楽大学講師、日本合唱指揮者協会会員。公募した島根県西部の中学生による「いわみ合唱塾NEXT CHOIR」の指揮者を務めるなど、若い世代の指導にも尽力している。



『ハートのアンテナ』

すぎもとりゅういち
杉本竜一 作詞・作曲
とみざわ ゆたか
富澤裕 編曲

2年 p.80・81 掲載

これまでの中学生の合唱曲とは雰囲気異なる、まさにロックと呼べる曲です。レコーディングでは、最初から最後まで全員がエネルギーを爆発させてノリを持続させました。そして「ハートのアンテナひろげて～」のように、言葉の重心を意識して歌ったのを覚えています。皆さんもノリを大切に、全体を通して絶対に緩まず、しかし重くならず歌い通してみてください。この曲にはクラシックの作法を当てはめず、ロックやポップスの様式感を参考にチャレンジしてみてくださいか。

横山琢哉(栗友会)
範唱音源演奏

『忘れることなんかできない』

わかまつ かん
若松 敏 作詞・作曲

3年 p.74~76 掲載

この曲はラヴェル作曲の『ボレロ』のように徐々に盛り上がる曲で、クライマックスに向けた分かりやすい構造が何よりも魅力ですね。さらに、Aメロ、Bメロと続いてサビに進行する瞬間に、原調の変ホ長調を離れハ長調に転調する点で、聴く人はもちろん、歌い手の心を突き動かします。山の頂上にたどり着いたら、想像もしていなかった美しい景色が見えた感動、と例えたらよいでしょうか。前半の内省的な場面から、言葉の繰り返しや転調もあいまって、最後には感極まる。合唱だからこそその表現を存分に味わえる名曲です！

相澤直人(あい混声合唱団 音楽監督)
範唱音源演奏

若松敏先生(中央)と、あい混声合唱団の皆さん。『忘れることなんかできない』収録後に撮影

あい混声合唱団

2007年発足。音楽監督である相澤直人と音楽的方向性を共にし、自主的で活発な演奏活動を展開。現代を生きる音楽家との強い連携が特徴であり、「作品の本質を捉え、曲が喜ぶ演奏をする」こと、「国内古今の合唱作品を魅力的に紹介する」ことを目標とする。第67回、第72回全日本合唱コンクール混声合唱の部銀賞受賞、他。



『この町が好き』

さいき なつこ
才木奈津子 作詞
よこやまじゅんこ
横山潤子 作曲

3年 p.77~79 掲載

明るい二長調で書かれていますが、使われている和音は7thや9thの響きがふんだんに用いられて、ただ明るいだけでなく、若い心に宿るちょっとしたはかなさ、寂しさも併せもっています。小さい頃、自分が生まれ育ったこの町を出て、にぎやかな街に行くことに憧れた。でも今はこの自然豊かな町を見つめていたい。決して変わらないでほしい。4ビートにのって時には語るように、時には優しく包みこむように、特に「この町が好き」という歌詞の締めくくりを、チャーミングで印象的に歌うとよいと思います。



弓田真理子 (ゆみた・まりこ)

二期会会員。『魔笛』『蝶々夫人』『椿姫』他数多くのオペラに出演。ハンガリー・リスト音楽院ホールでの『第九』や、WIENER VIRTUOSENとの共演。2007年には皇居内桃華楽堂において、天皇皇后両陛下をはじめとする皇族方の御前で『蝶々夫人』のアリア等を歌った。17年から毎年リサイタルを開催している。

弓田真理子
パート練習用音源演奏